

月刊
JMITU

イチョウ

新型コロナ対応版



麻布山 善福寺のイチョウ

11月号

日本金属製造情報通信労働組合大田地域支部
セガグループ分会 2022年発行

No.455

エンゲージメントサーベイ 本当に会社は良くなるのか？

エンゲージメント

サーベイとは？

エンゲージメントサーベイとは、従業員と企業の関係性を数値化し、従業員の会社や仕事に対する感情や会社とのつながりの強さを可視化して測る調査ツールを意味します。

エンゲージメントサーベイにより、組織の状態を客観的に見ることで、職場におけるチームや社員一人ひとりが抱える問題点や課題を具体的に把握できるようになるというのが、この調査のうりのようです。

エンゲージメントサーベイと従業員満足度の大きな違いは、会社が用意している労

働環境や福利厚生などの待遇や人間関係に対する従業員の満足度を調査します。従業員満足度を高めても、それが必ずしも組織課題の解決につながるとは言えません。

一方のエンゲージメントサーベイは、これまで見えてこなかった課題や問題点を浮き彫りにすることができ、課題や問題などに対して適切なフォローや施策を行うことで従業員の働きがい向上し、生産性も高めることができるという点が特徴です。

調査をして、適切な対応ができ、従業員も会社も良くなるのであれば、何も問題はありません。

問題は、匿名で回答者が特

定されないようになっていくかです。回答が特定されてしまうのでは、本心を書かず、建前で当たり障りのない回答しか得られず、従業員が抱える悩みや問題の本質を把握できず、解決もできません。また本心を書き、その回答内容によって、部署をなくされ、職場を異動されるなどという不利益になるようなことがあつてはなりません。

回答者の名前がはつきりわかる調査では、なかなか本音を聞き出しづらいものです。

過去に会社は、組合のアンケート結果やみんなの広場での書き込みについて、匿名で言っているの、それが事実かどうかわからない。問題があるのなら名前を出して、直接人事に言うべきだと発言していました。

人事に問題を、訴えられる人であれば問題ないですがすべての人がそういう人達だけではありません。言った本人に不利益がないという保証がない限りは、なかなか言えないものです。現在セガでもこのエンゲージメントサーベイ行われていますが、くれぐれも回答者に不利益な扱いがないようにしてもらいたいです。

秋闘・年末一時金

執行部了承妥結の方向へ

秋闘・年末一時金要求回答、セガ・SLSともに、一時金係数は2.0となりました。

支給日 12月9日 予定

この回答について執行部了承で妥結の方向に向かうことを会社に伝えました。

掌編小説

まさか

仙洞田一彦

二〇二二年十一月某日、ち

いさな集まりがあつた。都心から電車で一時間程の所。その建物は公園の一角にあつた。

公園の樹々は、赤く、黄色く

色づいていた。都心とは違つ

て視線を上げてもしさえぎる建

物はなく立冬直前、晩秋の空

が広がっていた。樹々の間隔

も広く取っているせい、寒

さは感じるものの、ゆつたり

した気分になり、さわやかそ

のものだった。今日という日

が無事に過ごせそうだと予感

させた。

教室風に人を入れたら四十

人は入れそうな部屋だ。それ

程の人数は居ないので、真ん

中を大きく開けて、囲むよう

に四角くテーブルを配置して

いた。私が指定された座席は、

四角の一边の真ん中で、そこ

は私一人だった。

午前十時に開会の挨拶、主

催者挨拶と続いて、私の話に入

った。私の講演に与えられ

た時間は一時間。

その一時間の半分を過ぎた

頃から尿意を催し始めた。そ

れはごく普通のことであり、

生きている人間なら当たり前

生きている証拠。そしてすぐ

にトイレに行ける状況ならト

イレに行くし、ちよつと我慢

することだって日常茶飯事。

それにしても寒さを感じる。

時節柄冷えるのは仕方ない。

持ち時間は後十五分ほど。

しかし尿意はだんだん強くな

る。それもいつもより強い感

じだ。頭の中を尿意に占領さ

れそうになるのを必死にこら

えて、話の内容に集中しよう

と努力した。あと数分、ひそ

かに気合を入れて尿意を遮断

何とか話を終えた。

「お疲れ様でした。それでは

みなさん、疑問、質問などあ

りましたら、手を上げてお願

いいたします」

私の左の辺の手前に掛けて

いた、開会挨拶をした司会者

が言った。

これは極めて普通の手順で

あつた。私が運営する集まり

であつても、講演が終われば

そのようにする。

私は左の手をちよつと上げ

て、意を決して言った。

「ちよつと、トイレに」

「あつ」

同年輩の司会者はすぐに察

してくれた。

「では十分ほど休憩しましよ

う」

皆の側に向けて言ってくれ

た。トイレに行ったが、我慢

と緊張が続いたせい、尿意

の強さのわりには出が少な

った。

私の話は終わったが、その

日の話し合いに四つのテーマ

が準備され、そのテーマにそ

って論議が交わされる予定だ

った。私の役割は、その話し

合いの助言をしたり、まとめ

のようなことをしたり、司会

者や出席者から問われれば答

えるという仕事だった。私に

それだけの能力があるかどう

かは別にして、少なくとも座

の中心にいななければならぬ

という与えられた仕事は大き

かった。

一番目のテーマは午前中に
終えて、昼食休憩に入った。

こうした仕事は過去にも、
何度か経験があった。早朝、
家を出なければならなかった
り、場合によっては前日に宿
泊しなければならなかったり
した。また緊張もある。だか
ら日常生活のリズムという点
では多少違ってくる。今朝も
いつもより一時間早く起きた。
この日のように寒い季節に頻
尿を経験したこともあった。
しかし、それも大体昼食休憩
までで、午後は日常を取り戻
していた。

午後の部が一時から始まっ
た。私の役割を果たすために
は、発言内容に神経を集中し
なければならぬ。

尿意というのは、尿がたま
った時に排泄しろという脳へ

の命令だと思う。ところが尿
がチヨロチヨロの場合は、尿
意が途切れない。脳へは絶え
ず「トイレへ行け」という命
令が出続けるのだ。チヨロチ
ヨロでは出たことにならない
からだ、きつと。

発言に耳を傾けていても、
内容が頭に入ってきて来ない。一
方で、「トイレに行け」という
命令がだんだん大きく脳に響
いてくる。ようやく、いつも
とは違うようだという思いが
する。

立ち上がって部屋を出て行
きたいが、四角に並べられた
テーブルの、その一辺に一人
で座らされている、しかも大
事な役割を負わされている—
—さされているなどと被害者の
ように言ってはならない—
しかし、しかし——と内面の

葛藤が激しくなる。尿意を抑
えつけていられなくなる。

また司会者に向かって左手
を上げる。

「ちよつと」

と言うが、もう司会者の返
事を待つ余裕もなくなる。返
事を待たずに立ち上がって部
屋の外に出てトイレに急ぎ足
で向かう。

——チヨロ、チヨロ。

部屋に戻り与えられた席に
座る。座ったとたんに「立ち
上がれ、行け」と、また内面
の声に命じられる。命令に従
わずにいると、額から汗が流
れて来る。足の方は震えが来
るほどの寒さを感じているの
に、汗がにじみ出て来るのだ。
ついに、何度も何度も立ち
上がるのは失礼になるので言
った。

「しばらく席を外させてくだ
さい」

それが三時ごろだった。閉
会時と写真撮影には参加し、
四時には閉会した。その後は
打ち上げと称して、居酒屋で
みんな一杯やる。これも昼
間のやり取り同様、興味深く
あり、面白い。

予定では出席するつもりで
あったが、既にそんな元氣、
余力は失われていた。私の様
子を見ていた主催者も、引き
止めるはずがなかった。

「ありがとうございます」

「きをつけて」

「お大事に」

次々に掛けられる言葉を上
の空で聞きながら会場出て、
駅に向かった。晩秋という言
葉から来る空気を実感するど
ころではない。役目を終えて

ホツとするどころではない。さいわい駅までの距離はたいしたことはない。尿意は相変わらずだ。出来るだけ刺激しないような歩き方をする。しかし股間を動かさずに歩くことはできない。この矛盾を感じながら、そろり、そろりと。

しかし時間は掛けられない。いくら人が少ないといっても立小便はできない。時間との勝負である。

駅に着いた。駅の素晴らしいとところはトイレがあることだ。改札を入ると真直ぐに向かった。

以前のことを思い出している余裕などないが、以前、あるところに行った。打ち上げで、ビールを飲んだ。帰りの電車に乗った。尿意を感じて駅で降りた。見回したらトイレ

レらしきものはないので、あわてて戻った。すると電車にトイレがついていた。そんな経験もある。

またしてもチョロチョロだが、とにかく用をすませてホームに降りた。

電車の案内表示を見ると、快速、そして各駅停車の順になっていた。知った土地なら、快速に乗ってどのくらいで次の駅に着くか見当がつく。止まらなかつたらどうしよう。各駅ならおよその見当はつく。次に止まる駅までの時間は重要だ。それまで尿意を抑え込んでおけるかどうかだ。まさか非常停止ボタンを押すわけにはいかないし、止まった場所にはトイレがあればいいが、なかつたらかえって大変。人知れずお漏らしするしかない

か。無難で確実というところで各駅停車に乗ることにした。席が空いても、ドアの脇に立っていた。座っても股間が刺激される。これは危険だ。座席が空いていても座らなかつた。周りのこともなにもかも考えられなくなっていた。尿意をなだめ、ごまかし、とにかく蒲田まで行き着かなければならない。

何回目か、東京駅でも降りた。エスカレーターで通路まで下がり、トイレの案内表示を探す。あつた。

「七十メートル先」
またホームに戻って電車で次の有楽町で降りるか、頭の中で電車を待つ時間と「七十メートル」がハカリにかけられる。

私は「七十メートル」歩く

のを選択した。多くの人が行き交うが、もうそんなことは意識に上らない。目に入らない。目標はたった一つだ。

東京駅蒲田間で一回も降りなかつたのは、距離感、時間が実感として分かっていたからかもしれない。

電車のドアに額を押し付け、耐えている顔を、周りの人に見られないようにした。

蒲田駅に着いた。でも油断はできない。蒲田駅を降りても家まで歩くか、バスの選択を迫られた。バスを降りたり乗ったりしても、近くに公衆便所がなければ降りてもしようがない。耐えられるかどうかだ。歩くとしても、自分の住んでいるところだから、どこどこに公衆便所があるかは知っている。しかしその

間隔は微妙だ。

バスが間もなく来そうなので、バスを選択した。

こうして一時間ちよつとかかるくらいの所を三倍くらいの時間を掛けて自宅に着いた。

トイレに駆け込んだのはもちろんだが、症状はひどくなつた。トイレを出て一歩外に踏み出すと、回れ右をしてまた便座にしゃがむ。二歩、三歩と踏み出せない。二歩、三歩歩けても、布団に横になろうと体をひねつたとたん、激しい尿意に襲われる。その夜は布団に横になつている時間より、便座に掛けている時間の方が長かった。便座に掛けていても排尿の激痛からは逃れられない。

ほとんど眠れないまま朝を迎えた。今日は日曜日。病院

はやつていない。しかし、外に出る自信はない。トイレから数歩離れるのが精いっぱいだから、病院までなんてとても駄目だ。シヨッピングセンターにある薬局までなら何とかなるかもしれない。シヨッピングセンターにはトイレがあるからだ。よく準備をし、無駄なく歩き薬局にたどり着くようにしよう。

たしか昔、排尿を我慢していて膀胱炎になつたという話を聞いたことがある。パソコンの前に立つた。座ると股間を刺激するから座れない。

インターネットで膀胱炎を調べた。膀胱炎に効く薬も調べた。

なんと膀胱炎と前立腺癌の症状は似ているらしい。

「ガーン」

癌の話をしていて「ガーン」と茶々を入れた友人のことを思い出した。

私は、もう一度「ガーン」とつぶやいてから、「ヤバツ」と、ひとりごちた。